

題目：攻撃行動は他者の目の影響を受けるのか？

—他者の目と存在脅威管理理論の関係の検討—

氏名：岩崎 美由紀

指導教官：高橋 伸幸

集団間で起こる争いの中には、「自分たちと違う集団である」ということを理由として起こる争いがある。なぜそのような争いが起こるのかを説明する理論の一つに、存在脅威管理理論（以下 TMT）がある。しかし、先行研究の多くが心理レベルの反応に対する研究であること、実験参加者の行動と関係のない第三者の存在について検討がされていないということから、TMT で集団間の争いを説明するためには、不足している点があると考えられる。そこで、本研究では第三者がいる状況において、存在論的恐怖を感じると自身と違う集団の人に対しての攻撃行動が起こるのかを検討した。

本研究では、まず実験参加者に自身が死ぬことについて、あるいは重要な試験について考えさせる 2 条件を設定した。次に、自身と違う文化的世界観を持つ、辛いものが嫌いな人が飲むスープの味をチリソースで調整させた。その際、参加者が入れたソースの量を知る人がいない条件、参加者と違う文化的世界観を持つ人が知っている条件、参加者と同じ文化的世界観を持つ人が知っている条件の 3 条件を設定し、先の 2 条件と組み合わせて、計 6 条件を設定した。他者への攻撃行動は自身へのネガティブな評判となる可能性があるため、参加者が入れたソースの量を知っている人がいる条件においては、ソースの量は少なくなると著者は予測した。

実験の結果、ソースの量について条件差は確認されなかった。ただし、スープを飲む人の味の好みを気にした人ほどソースの量が少なくなる傾向が、ソースの量が少ない人ほどスープを飲む人がスープを「好みに合っている」と思うと考える傾向が見られた。そして、存在論的恐怖について考え、かつ参加者と同じ文化的世界観を持つ人がソースの量を知っている条件においては、特にその傾向が強く見られた。この結果から、存在論的恐怖を感じ、自身と同じ文化的世界観の人が攻撃行動について知っている状況では、比較的強い攻撃行動が起こるが、スープを飲む人の情報を意識すると、攻撃行動は弱くなると考えられる。また、同条件において第三者の存在を意識した人ほどソースの量が多くなる傾向が見られた。これらの結果から、存在論的恐怖は第三者という要因に何らかの影響を及ぼし、その結果、攻撃行動にも影響が出たと考えられる。ただし、攻撃行動の程度には条件間において差が見られないこと等から、TMT で集団間の争いを説明できるとはいえないと考えられる。